東京外国語大学『語学研究所論集』29(23), 2024
Tokyo University of Foreign Studies, *Journal of the Institute of Language Research* 29(23), 2024

〈特集「アスペクト」〉

ジンポー語のアスペクト資料
Materials on Aspect in Jinghpaw

倉部 慶太
Keita Kurabe

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿では，風間・中澤・鈴木（2010）の調査票に基づき，ジンポー語のアスペクトに関する資料を提示する．ジンポー語は，テンスを持たないアスペクト・ムード卓立型の言語である．動詞に義務的に標示される文法アスペクトは，非変化相と変化相の二項対立を示す．無標の前者に対し，有標の後者のアスペクトは，開始か終了かに関わらず，直近の状態変化を標示する．加えて，アスペクトは，動詞に後接される任意の助動詞によっても表されうる．これにより，継続相，結果相，完了相，経験相など，多様なアスペクトが標示される．

Abstract: This paper provides materials on aspect in Jinghpaw based on the questionnaire developed by Kazama, Nakazawa, and Suzuki (2010). Jinghpaw is an aspect- and mood-prominent language that lacks grammatical tense. The grammatical aspect obligatorily marked on verbs exhibits a binary opposition between non-change-of-state and change-of-state aspects. The marked change-of-state aspect encodes a recent change of state, regardless of whether it signifies the onset or endpoint of an event, in contrast to the unmarked non-change-of-state aspect. Aspect can also be expressed through optional auxiliary verbs following the main verb, allowing for distinctions such as continuous, resultative, completive, and experiential aspects.

DOI: https://doi.org/10.15026/0002001045
キーワード：ジンポー語，シナ・チベット語族，ビルマ，アスペクト，状態変化
Keywords: Jinghpaw, Sino-Tibetan, Burma, aspect, change-of-state

1. はじめに

ジンポー語（ISO 639-3: kac）は，シナ・チベット語族（Sino-Tibetan）チベット・ビルマ語派（Tibeto-Burman）の言語のひとつである．北ビルマ（ミャンマー）を中心に分布するが，一部の話者は隣接する中国雲南省および北東インドにも居住している．この言語は，言語的に多様なカチン人（Kachin）の共通語のひとつとして通用しており，言語の異なるカチンの人々を結びつける紐帯の役割を担っている（Kurabe 2021）．ビルマに居住する話者の大部分は，ビルマ語とのバイリンガルである．多くのチベット・ビルマ諸語と同様に，ジンポー語は動詞末尾型の語順を持つ．現代のジンポー語は，節および名詞句の両レベルにおいて従属部標示型言語に分類される．近隣の東南アジア大陸部諸語と同様に，文法テンスを持たず，アスペクト・ムード卓立型の言語である．名詞句は文脈から復元が可能な場合，しばしば明示されない（Kurabe 2016, 2017）．

本稿の著作権は著者が保持し，クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します．
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

本稿では,『東京外国語大学語学研究所論集』15 号付録の風間・中澤・鈴木（2010）の調査票に基づき，ジンポー語のアスペクトに関する資料を提示する．この翻訳型の調査票には，アスペクトおよび関連現象を調査することを目的とした 28 の例文が収録されている．本稿で提示するジンポー語資料は，この調査票を用いて 2023 年 12 月に実施したエリシテーション調査によって得られたものである．調査のコンサルタントは，ビルマのカチン州（Kachin State）ミッチーナー市（Myitkyina）出身の R 氏である．R 氏は 1995 年生まれの女性話者であり，言語形成期を含むすべての期間を同市で過ごした．R 氏はジンポー語とビルマ語のバイリンガルであるとともに，英語の高い運用能力も有する．資料収集は，アンケート項目の英文をジンポー語に翻訳する形で行った．ただし，日本語では形式的に区別されるが英語では区別されない調査項目については, 筆者が適宜説明を加え, 調査項目の意図を反映する文を採集した．

以下，第 2 節では，アスペクト資料の背景情報として，ジンポー語のアスペクトおよび関連現象を概観する．続く第 3 節では，風間・中澤・鈴木（2010）の調査票に基づき，調査項目をひとつずつ記述するとともに，それぞれに解説を与える．

1. ジンポー語のアスペクト

ジンポー語は，文法的なテンスを持たないアスペクト・ムード卓立型の言語である．アスペクトとムードは，動詞複合体の TAM スロットを埋める形で義務的に標示される．ジンポー語は，非変化相（non-change-of-state）と変化相（change-of-state）の二値的アスペクトを文法化させている．前者は無標であるのに対し，後者は s-（または sə-）によって明示的に標示される．ムードは TAM スロットの最後の位置を占め，叙述，疑問，感嘆，推測，命令，勧誘の 6 つの異なる範例的値から構成される（Kurabe 2016）．たとえば，(1) は非変化相の叙述文であり，(2) は変化相の叙述文である．変化相は直近の状態変化を標示し，開始と終了の両方の局面を標示することができる．すなわち，(2) の例は「もう降り始めた」または「もう降り終わった」の両方の解釈が可能である．これに対し，(1) のような非変化相は，状態変化に関心がなく，明示的な形式も持たない．非変化相はゼロで表記しうるが，本稿では，非変化相を表記しないことにする．

(1) mərauŋ thùʔ=ʔay.
rain rain=DECL
「雨が降った」

(2) mərauŋ thùʔ=s-ay.
rain rain=COS-DECL
「雨がもう降った」

基本的に，変化相は非限界事象（atelic）では開始を，限界事象（telic）では終了を標示する．すなわち，状態動詞や動作動詞がこのアスペクトで標示される場合，開始の局面を示す．一方，到達動詞や達成動詞がこのアスペクトで標示される場合，終了の局面を示す．このように，文法アスペクトと語彙アスペクトのインタラクションが認められる．より正確には，これは文法アスペクトとアスペクトクラスのインタラクションと見るべきである．すなわち，アスペクトは個別の動詞に依存するのではなく，述語・項構造のレベルで決定される（Verkuyl 1972, Comrie 1976, Smith 1997）．そのため，非限界動詞であっても，方向補語（「庭まで」など），指定量（「ひとつ」など），度量句（「1 杯」,「3 回」など）との共起によって限界事象を表すことが可能である（倉部 2019）．したがって，(2) の例を (3) のように表現することで，終了の解釈のみが実現される．

(3) məraŋ khyiŋ khùm mi thùʔ=s-ay.
rain hour CLF one rain=COS-DECL
「雨が 1 時間もう降った（降り終わった）」（Kurabe 2016: 7）

変化相と非変化相の対立は，上記のような叙述文だけでなく，ほかのムード標識とも共起する．たとえば，以下の例文は，変化相と勧誘や疑問のムード標識の組み合わせの例である．

(4) dày-náʔ ʔánthe nday=kóʔ khrìŋ=sə-gáʔ.
this-night 1pl this=LOC rest=COS-HORT
「今夜，私たちはここでもう休みましょう」（Kurabe & M. King Nang 2017）

(5) naŋ bùŋli grày ɕəkùt=ǹná, grày bá=sə-nî?
2sg work very try.hard=SEQ very be.tired=COS-Q
「あなたは仕事をとても頑張って，もうとても疲れたか？」（Kurabe & M. Ja Tawng 2017）

文法アスペクトに加えて，アスペクトと密接に関連する形式として，助動詞が挙げられる．動詞の文法化によって文法的な意味を担うようになった形式には，助動詞と補助動詞の 2 種類が存在する．一方は，否定辞を付加できないなど，動詞としての特徴を失った形式であり，本稿ではこれを「助動詞」と呼ぶことにする．他方は，否定辞の付加が可能であるなど，動詞の一種と考えられ，本稿では「補助動詞」と呼ぶ．補助動詞には，義務や可能などのモダリティを表す形式が含まれる．一方，アスペクトは多くの場合，助動詞によって標示される．たとえば，動詞「横たわる」から発展した助動詞 =to は継続相の標識として機能し，（6）および（7）のように，動作の継続や結果の継続を表す．さらに，結果相の助動詞 =dá（動詞「置く」に由来），完了相の助動詞 =màt（動詞「失う」に由来），経験相の助動詞 =yu（動詞「見る」に由来）などが観察される．

(6) ǹgùn-jàʔ-wa=gò ŋá khuy=to=ʔay.
power-be.strong-man=TOP fish hunt=CONT=DECL
「力持ちは魚を釣っていた」（Kurabe & Z. Brang Seng 2017）

(7) ɕàn-toŋ ləŋây-mi gá=kóʔ khràt=to=ʔay...
meat-lump one-one ground=LOC fall=CONT=DECL
「ひとつの肉塊が地面に落ちていた…」（Kurabe & N. Htu Bu 2017）

なお，上述のとおり，ジンポー語は文法的テンスを持たない言語である．たとえば，以下のような mənàw-póy ŋà=ʔay という文は，過去・現在・未来のいずれの解釈も可能である．この文の時間的解釈は，動詞によって決定されるのではなく，「昨日」「いま」「明日」などの時間名詞によって明示される．

(8) məní mənàw-póy ŋà=ʔay.
yesterday Manau-festival be=DECL
「昨日，マナウ祭りがあった」

(9) yáʔ mənàw-póy ŋà=ʔay.
now Manau-festival be=DECL
「いま，マナウ祭りがある」

(10) phótdèʔ mənàw-póy ŋà=ʔay.
tomorrow Manau-festival be=DECL
「明日，マナウ祭りがある」

3. アスペクト資料

本節では，風間・中澤・鈴木（2010）の調査票に基づく 28 文の調査項目に対するジンポー語のデータを提供する．なお，本節の例文番号は調査票の例文番号に基づく．また，本節の例では，1 段目に調査票からの日本語文を示し，4 段目にコンサルタントに提示した対応する英文を示す．

以下の例文（1）は，動詞「来る」による動作の完了自体に焦点を当てた表現（完結相〜パーフェクト）を意図した調査項目である．一方，（2）は動作の完了に加え，現在もその結果としてここに存在しているという状態を意識した表現（パーフェクト）を意図した調査項目である（風間 2010: 32）．ジンポー語では，この 2 つを形式的に区別することが可能である．前者は動詞の変化相によって，後者は変化相と継続相の助動詞の組み合わせによって表現される．

(1) トイオンさんはもう来た．
thòyʔoŋ=gò sa=wà=s-ay.
PSN=TOP go=VEN=COS-DECL
‘Htoi Awng already came.’

(2) トイオンさんはもう来ている．
thòyʔoŋ=gò sa=wà=to=s-ay.
PSN=TOP go=VEN=CONT=COS-DECL
‘Htoi Awng has already come.’

次の二例は，「完結相の否定」および「現在の否定」を意図した調査項目である（ibid., p. 33）．ジンポー語では，これら二つは形式上区別されず，助動詞 =ɕì「まだ」をともなう非変化相が用いられる．

(3) トイオンさんはまだ来ていない．
thòyʔoŋ=gò n-sa=wà=ɕì=ʔay.
PSN=TOP NEG-go=VEN=still=DECL
‘Htoi Awng hasn’t come yet.’

(4) トイオンさんはまだ来ない．
thòyʔoŋ=gò n-sa=wà=ɕì=ʔay.
PSN=TOP NEG-go=VEN=still=DECL
‘Htoi Awng hasn’t come yet.’

次の例文は，「近未来」を意図した調査項目である．多くの言語では，無標の動詞形（単なる現在形）

によって「近未来」を表すことができるが（ibid., p. 34），ジンポー語では，無標の動詞形（非変化相）ではなく，非現実の法標識を用いる必要がある．

(5) トイオンさんはもう（すぐ）来る．
thòyʔoŋ=gò (lòy ń-náʔ=yàŋ) sa=wà=na.
PSN=TOP little NEG-spend=when go=VEN=IRR
‘Htoi Awng will come (soon).’

次の例は，「発見」を意図した調査項目である．これはまさにいま起きている出来事であるため，基本的に現在形を用いる言語が多い．ただし，日本語のように過去形を用いる言語もあり，とくに中央・東アジアに分布する（ibid., pp. 35–36）．ジンポー語では，以下のように，この状況には変化相を用いる．

(6) あ！トイオンさんが来た！
ʔò, thòyʔoŋ sa=wà=s-ay.
INTJ PSN go=VEN=COS-DECL
‘Oh! Andy has come!’

次の例は，「現在から切り離された過去」を表現することを目的とした調査項目である．多くの言語では，単純な過去形が期待されるが，言語によっては大過去などを用いて現在からの切り離しを明示する場合もある（ibid., pp. 36–37）．ジンポー語では，以下の例のように，無標の非変化相で表現される．

(7) おとといトイオンさんが来たよ．
mənî-ɕoŋ-ɕənî thòyʔoŋ sa=wà=ʔay.
yesterday-before-day PSN go=VEN=DECL
‘Htoi Awng came the day before yesterday.’

次の例は，「現在から切り離された過去の否定」を意図した調査項目である．多くの言語では，（7）の動詞形の否定を用いる（ibid., pp. 37–38）．ジンポー語でも，（7）の動詞に否定辞を付加して表現される．

(8) おとといトイオンさんは来なかったよ．
mənî-ɕoŋ-ɕənî thòyʔoŋ n-sa=wà=ʔay.
yesterday-before-day PSN NEG-go=VEN=DECL
‘Htoi Awng didn’t come the day before yesterday.’

本節の（1）から（8）は，自動詞に対する調査項目であった．一方，次の（9）と（10）は，他動詞の「パーフェクト」を意図した調査項目である．（9）は，ジンポー語では変化相を用いて表現される．

(9) 私はあのリンゴをもう食べた．
ŋay day jà-məgo-sì ɕá=(káw)=s-ay.
1sg that gold-pear-fruit eat=away=COS-DECL
‘I already ate that apple.’

次の例は，他動詞の「パーフェクトの否定」を意図した調査項目である．本節の（3）および（4）と同様に，ジンポー語では，形式上（10a）および（10b）は区別されない．

(10a) 私はあのリンゴをまだ食べていない．
ŋay day jà-məgo-sì ń-ɕá=ɕì=ʔay.
1sg that gold-pear-fruit NEG-eat=still=DECL
‘I haven’t eaten that apple yet.’

(10b) 私はあのリンゴをまだ食べない．
ŋay day jà-məgo-sì ń-ɕá=ɕì=ʔay.
1sg that gold-pear-fruit NEG-eat=still=DECL
‘I won’t eat that apple.’

次の例は，「現在進行」を意図した調査項目である．独自の進行形を持つ言語がある一方で，現在形によって現在進行を表す言語も存在する．東アジアの多くの言語では，文法化した存在動詞を用いて進行を表現する（ibid., pp. 40–41）．ジンポー語でも，（11a）のように，存在動詞 ŋà「いる，住む」に由来する助動詞 =ŋà を用いて進行を表すことができる．また，（11b）のように，動詞 to「横たわる」に由来する助動詞 =to を用いることもできる．両形式は置き換え可能であり，その違いは前者が文語的，後者が口語的というスタイルの差異にある．なお，第 2 節で述べたとおり，両形式は進行に加えて結果の継続も表す．したがって，より正確には，これらの形式は進行相ではなく継続相の標識といえる．

(11a) あの人はいま（ちょうど）そのリンゴを食べています．
yáʔ ɕi day jà-məgo-sì ɕá=ŋà=ʔay.
now 3sg that gold-pear-fruit eat=CONT=DECL
‘He’s eating that apple just now.’

(11b) あの人はいま（ちょうど）そのリンゴを食べています．
yáʔ ɕi day jà-məgo-sì ɕá=to=ʔay.
now 3sg that gold-pear-fruit eat=CONT=DECL
‘He’s eating that apple just now.’

次の例は，対象物を主語とした「結果状態」を意図した調査項目である．上述のとおり，ジンポー語の継続相は「動作の継続」と「結果の継続」の両方を含む．そのため，（12a）と（12b）のように，（11）と同じ形式を用いて「結果の継続」を表すことができる．さらに，（12c）のように，「結果の継続」には，動詞 dá「置く」に由来する助動詞 =dá を用いることもできる．なお，ジンポー語はテンスを持たないため，調査項目の日本語文における「開いている」と「開いていた」の間に形式上の区別はない．

(12a) 窓が開いている．／開いていた．
khuwót phòʔ=ŋà=ʔay.
window open=CONT=DECL
‘The window is/was open.’

(12b) 窓が開いている．／開いていた．
khuwót phòʔ=to=ʔay.
window open=CONT=DECL
‘The window is/was open.’

(12c) 窓が開いている．／開いていた．
khuwót phòʔ=dá=ʔay.
window open=RES=DECL
‘The window is/was open.’

次の例は，「習慣」を意図した調査項目である．言語によって，不完結相，現在形，進行形，習慣専用形式などが用いられる（ibid., p. 42）．ジンポー語では，以下の例のように，無標の形式（非変化相）を用いて習慣的なアスペクトが表される．日本語と異なり，ビルマ語同様（岡野 2010: 221–222），習慣には継続相を用いることはできないようである．

(13) 私は毎朝新聞を読む／読んでいる．
ŋay jəphòt-ɕəgù ɕì-làyka thí=ʔay.
1sg morning-every news-letter read=DECL
‘I read the newspaper every morning.’

次の例は，「開始時点の不明瞭な状態」を意図した調査項目である．形容詞や現在形によって「静的」に表す言語もあれば，進行形を含むパーフェクト的な形式によって「動的」に表す言語もある（ibid., pp. 42–43）．ジンポー語では，以下のように，無標の非変化相が用いられる．

(14) あなたは（あなたの）お母さんに似ている．
naŋ=gò náʔ ʔnû=thèʔ buŋ=ʔay.
2sg=TOP 2sg.GEN mother=COM resemble=DECL
‘You look like your mother.’

次の例は，「過去の習慣」を意図した調査項目である．言語によっては，単なる過去形，不完結相，習慣専用の形式，過去の習慣に特化した形式などを用いる（ibid., pp. 43–44）．ジンポー語では，以下の例のように，無標の非変化相が用いられる．（13）および（15）の例文のとおり，これらの例では「現在」と「過去」は形式上区別されない．

(15) 私はその頃毎日学校に通っていた．
ŋay day tèn=thàʔ ɕəní-ɕəgù joŋ sa=ʔay.
1sg that time=LOC day-every school go=DECL
‘I used to go to school every day (back then).’

次の例は，「経験」を意図した調査項目である．言語によって，現在完了形，不完結相過去形，単なる過去形などが用いられる．東・東南アジアでは，経験に特化した形式が用いられることも多い（ibid., pp. 44–45）．ジンポー語でも，（16a）のように，経験に特化した助動詞 =ga が用いられる．経験は，（16b）

のように，動詞 yu「見る」に由来する助動詞 =yu を用いて表すこともできる．

(16a) 私はバモーに行ったことがある．
ŋay manmo=dèʔ dù=ga=ʔay.
1sg Manmaw=ALL arrive=EXP=DECL
‘I have been to Bhamo.’

(16b) 私はバモーに行ったことがある．
ŋay manmo=dèʔ dù=yu=ʔay.
1sg Manmaw=ALL arrive=EXP=DECL
‘I have been to Bhamo.’

次の例は,「起動相」を意図した調査項目である．アクツィオンスアルトや局相（位相）動詞「始める」を用いる言語などがある．スラブ系言語では完結相が用いられる（ibid., pp. 45–46）．ジンポー語では，以下の例のように，変化相が用いられる．第 2 節で述べたとおり，このアスペクトは開始と終了の両局面を標示することが可能である．

(17) やっとバスは走り出した／走り始めた．
phaŋ-jəthùm=ʔè=gò modo ròt=s-ay.
after-end=LOC=TOP car rise=COS-DECL
‘Finally, the bus began moving.’

次の例は,「長時間継続」を意図した調査項目である．言語によって，単なる過去形，過去進行形，不完結相，長時間継続専用の形式，あるいは時の副詞などを用いる（ibid., p. 46）．ジンポー語では，以下の例のように，継続相の標識を用いて表現される．

(18) 昨日彼女はずっと寝ていた．
ɛi mənı́-túp ʔyúp=to=ʔay.
3sg yesterday-whole sleep=CONT=DECL
‘She slept all day yesterday.’

次の例は,「試行」を意図した調査項目である．言語によって，助動詞，補助動詞，程度副詞などを用いて表現される．バルト・スラブ諸語では，完結相の表現が用いられる．「試食する」や「味見する」のような語彙的動詞を用いる言語もある．アジアの言語では，動詞「見る」を補助動詞的に用いて「試行」を表す言語も多い（ibid., pp. 46–47）．ジンポー語でも，次の例のように，動詞 yu「見る」に由来する助動詞 =yu を用いることが可能である．

(19) 私はそれをちょっと食べてみた．
ŋay day=phéʔ lòy ɛá=yu=ʔay.
1sg that=ACC few eat=CON=DECL
‘I tried eating it a bit.’

次の例は,「多方向への客体的分配」を意図した調査項目である.アクツィオンスアルトを用いる言語,語彙的動詞「分配する」を用いる言語,「分ける」と「与える」の組み合わせを用いる言語などがある（ibid., p. 47）．ジンポー語でも，以下の例のように，動詞「分ける」と「与える」の動詞連続を用いて表現する．

(20) あの人はそれ（ら）をみんなに分け与えた．
ɛi yòŋ=phéʔ day=ni gərán jòʔ=ʔay.
3sg all=ACC that=PL divide give=DECL
‘He gave them to everyone.’

次の例は，「近未来の勧誘」を意図した調査項目である．差し迫った未来の動作には，過去，近過去，完結相過去などを用いる言語がある．日本語「さあ，行った行った！」のように，過去形によって「せきたてるような」「差し迫った」ニュアンスを伴う言語もある（ibid., pp. 47–48）．ジンポー語では，以下の例のように，この状況を変化相で表すことができる．

(21) さあ，（私たちは）行くよ！
sa=sə-gáʔ.
go=COS-HORT
‘Let’s go!’

次の例は，「恒常的真理」を意図した調査項目である．不完結相，進行形，習慣形式などを用いる言語がある（ibid., p. 48）．ジンポー語では，（22a）の例のように，無標の非変化相が用いられる．上記の（13）のとおり，この形式は習慣を表す際にも用いられる．また，（22b）のように，「恒常的真理」は継続相を用いて表すことも可能であるという．この点はビルマ語と異なるようである（岡野 2010: 226）．

(22a) 地球は太陽の周りを回っている．
mùŋkàn-gá=gò jan-gá=phéʔ gəyin=ʔay.
world-land=TOP sun-land=ACC turn=DECL
‘The earth goes around the sun.’

(22b) 地球は太陽の周りを回っている．
mùŋkàn-gá=gò jan-gá=phéʔ gəyin=to=ʔay.
world-land=TOP sun-land=ACC turn=CONT=DECL
‘The earth goes around the sun.’

次の例は，「将然相」を意図した調査項目である．動詞関連形式に着目すると，（近未来を示す）時間的形式によって客観的に表す言語と，モダリティ的形式（「～のようだ」など）によって主観的に表す言語がある（ibid., pp. 48–49）．ジンポー語では，変化相と非現実法の組み合わせによって表す.

(23) あの木は今にも倒れそうだ.
day phún gəlàw=sə-na.
that tree topple=COS-IRR
‘That tree is about to topple.’

次の例は，「将然相−未遂」を意図した調査項目である．時間的な表現を用いる言語とモダリティ的な表現を用いる言語がある（ibid., pp. 49–50）．ジンポー語では，以下の例のような切迫性を表す助動詞 =mó が用いられる．この形式は，動詞 mó「意図がある」に由来する．

(24) 私はあやうく転ぶところだった．
ŋay gənoy gəlàw=mó=ʔay.
1sg almost trip=be.about.to=DECL
‘I was almost about to trip.’

次の例は，「準備」を意図した調査項目である．対応する表現を持たない言語がある一方で，文法化した「置く」を用いる言語も多い（ibid., p. 50）．ジンポー語でも，以下の例のように，動詞 dá「置く」が文法化した助動詞を用いる．この形式は，（12c）のように，結果の継続の意味もカバーする．

(25) 明日客が来るので，パンを買っておく．
phótdèʔ mənàm dù=na məjò, mùk məri=dá=na.
tomorrow guest arrive=NMLZ because bread buy=RES=IRR
‘We will have guests tomorrow, so I will buy some bread.’

次の例は，主節が過去のときに従属節に現在形が現れるかどうかを調査することを意図した調査項目である．言語によって，過去形を用いるもの，現在形を用いるもの，不定詞などテンスと無関係な形式を用いるものなどがある（ibid., pp. 50–51）．第 2 節で述べたとおり，ジンポー語は文法的なテンスを持たない言語である．形式上，（26）と（27）の間に区別はなく，無標の非変化相が用いられる．以下の例のように，時の副詞節は名詞修飾節（名詞化）と時間を表す名詞で形成される（倉部 2020）．以下の角括弧は，名詞修飾節の境界を示す．

(26) 私は市場に行ったとき，この袋を買った．
ŋay [gát sa=ʔay] ɕəlóy nday ńphyê məri=ʔay.
1sg market go=NMLZ time this bag buy=DECL
‘I (had) bought this bag when I went to the market.’

(27) 私は市場に行くとき，この袋を買った．
ŋay [gát sa=ʔay] ɕəlóy nday ńphyê məri=ʔay.
1sg market go=NMLZ time this bag buy=DECL
‘I (had) bought this bag when going to the market.’

次の例は，主節と補文節の時制の一致を調査することを目的とした調査項目である．時制の一致を持たない言語がある一方で，時制の一致を持つ言語では，大過去や過去完了などが現れる（ibid., p. 51）．ジンポー語では，以下の例のように，主節と補文節の両方で無標の非変化相を用いる．補文節は節の名詞化によって形成される（倉部 2020）．以下の角括弧は，補文節の境界を示す．

(28) 私は彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた.

[ɛi nday ńphyê gát=kóʔ məri=ʔay]=phéʔ ŋay ce=ʔay.

3sg this bag market=LOC buy=NMLZ=ACC 1sg know=DECL

‘I knew he (had) bought the bag in the market.’

略号一覧

1pl	1st person plural
1sg	1st person singular
2sg	2nd person singular
3sg	3rd person singular
ACC	accusative
ALL	allative
CLF	classifier
COM	comitative
CON	conative
CONT	continuous
COS	change-of-state marker
DECL	declarative
EXP	experiential
GEN	genitive
HORT	hortative
INTJ	interjection
IRR	irrealis
LOC	locative
NEG	negative
NMLZ	nominalizer
PL	plural
PSN	person name
Q	question
RES	resultative
SEQ	sequential
TOP	topic
VEN	venitive

参考文献

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge: Cambridge University Press.

風間伸次郎. 2010.「特集アスペクト：まえがき」『語学研究所論集』15. 25–52.

風間伸次郎，中澤英彦 & 鈴木玲子. 2010.「特集アスペクト：付録アンケート」『語学研究所論集』10. 53–57.

Kurabe, Keita. 2016. A grammar of Jinghpaw, from Northern Burma. Ph.D. dissertation, Kyoto University.

Kurabe, Keita. 2017. Jinghpaw. In Graham Thurgood & Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan languages*. 2nd ed., 993–1010. London and New York: Routledge.

倉部慶太. 2019.「ジンポー語の変化相と限界性」『第 159 回日本言語学会大会予稿集』131–137.

倉部慶太. 2020.「ジンポー語の名詞修飾表現」プラシャント・パルデシ・堀江薫（編）『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』323–340. 東京：ひつじ書房.

Kurabe, Keita. 2021. Typological profile of the Kachin languages. In Paul Sidwell & Mathias Jenny (eds.), *The languages and linguistics of mainland Southeast Asia: A comprehensive guide*, 403–432. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.

Kurabe, Keita & M. Ja Tawng. 2017. Salu Salat A Shabrai (The Reward of Hard Work). EAF+XML/MPEG/VND.WAV. KK1-1418 at catalog.paradisec.org.au. https://dx.doi.org/10.4225/72/598b380acf7a3

Kurabe, Keita & M. King Nang. 2017. Masha Angawk Masum (The Three Fool Men). EAF+XML/MPEG/VND.WAV. KK1-2215 at catalog.paradisec.org.au. https://dx.doi.org/10.26278/5fa176a6b9ff2

Kurabe, Keita & N. Htu Bu, 2017. Chyahkyawn Hte U Hka A Lam (The Wolf and the Crow). EAF+XML/MPEG/VND.WAV. KK1-0275 at catalog.paradisec.org.au. https://dx.doi.org/10.4225/72/598892df70449

Kurabe, Keita & Z. Brang Seng. 2017. Nga Hkwi La Wa Hte Baren Shayi (The Fisherman and the Dragon Girl). EAF+XML/MPEG/VND.WAV. KK1-0915 at catalog.paradisec.org.au. https://dx.doi.org/10.4225/72/5989e6a8561e0

岡野賢二. 2010.「現代口語ビルマ語のアスペクト表現について」『語学研究所論集』10. 215–230.

Smith, Carlota S. 1997. *The parameters of aspect.* 2nd ed. Dordrecht: Kluwer.

Verkuyl, Henk J. 1972. *On the compositional nature of the aspects*. Dordrecht: Reidel.

執筆者連絡先：kurabe@aa.tufs.ac.jp

原稿受理：2024 年 12 月 1 日